

日本語における可能表現の習得について

— ノルウェー人の日本語学習を中心に —

Harry SOLVANG

1. はじめに

可能表現とは主体がある動作を実現することが可能か不可能であるかどうかを表わす表現形式である。それを表わすため、日本語には様々な手段が備えられている。しかしながら、日本語学習者（上級者を除いて）の観点から考えると、以下の1)と2)に示されたように、主に2つの形式に絞るのが普通だろう。

- 1) 彼は5千メートルを泳ぐことができます。
- 2) 辛い料理が食べられますか。

つまり、一つの形式は「動詞の基本形+「ことができる」」という分析的あるいは慣用句的な形式であり、もう一つは動詞の活用形である可能形という形式である。可能表現が表わす意味的象徴によって、分類することができる。益岡・田窪（1989）によると、可能表現を大きく「能力可能」と「状況可能」という2つのカテゴリーに分けることができる。「能力可能」とは文の中の状況と関わらず主体自身が持っている（あるいは持っていない）行為の能力のことであり、「状況可能」とは主体がある動作を実現するために必要な状況が文の中に備わっている（あるいは備わっていない）ので、その状況における行為の可能性のことである¹。前者の例として3)を挙げ、後者の例として4)を挙げる。

- 3) 3年間フランスで留学したから、フランス語が話せます。
- 4) 今日は忙しいので、あまり長く話せません。

上述の条件による可能表現の分類については、世界の言語の中で、「能力」と「状態」を異なった形式で表現し分ける言語が存在し、その例として、姫野（2001）は中国語を挙げている。また、リス語（ビルマ語）には、knowing how と physical ability という二種類の能力を表わすための形式が存在している（Palmer, 2001）。一方、日本語は可能の2つの意味を異なった形式で区別しない²。例文5)、6)に示されているように、同じ形式で二通りの意味が表わされる。

意味を異なった形式で区別しない²。例文 5)、6) に示されているように、同じ形式で二通りの意味が表わされる。

5) 私は泳ぐことができる (能力)。

6) 今日は風が強くて、泳ぐことができない (状況)。

また、7) と 8) が示すように、動詞の可能形と「～ことができる」はほぼ同義で使われていて、互いに置き換えられても、意味に違いが生じないことが多い。

7) 刺身を食べることができる。

8) 刺身が食べられる。

しかしながら、動詞の可能形と「～ことができる」のどちらでも使える場合が多くても、自由に置き換えられるわけではない。実は、様々な面におけるの違いがあることが指摘された (詳細は渋谷、(1995))。ここでは、一般に認められた用法上の違いを表 1 にまとめることにした。

表 1 「～ことができる」と可能形の用法上の違い

～ことができる	可能形
文章語 (書きことば) 的な形式	口語 (話しことば) 的な形式
論文、公的文章などに多く使われる	日常頻出の動詞に使われやすい
属性表現に使うことができない	属性表現に使われる
「助かる」などの動詞に使われる	「助かる」などの動詞に使われない

2. 日本語教材に見られる可能表現

日本語講座でよく使われている教科書を参考した結果、可能表現は初歩的な問題として見なされているようなことが分かった。また、それぞれ「～ことができる」と「可能形」が教科書に導入する順序を調べたら、様々であることも分かった。例えば、『新日本語の基礎』には、「～ことができる」が第 18 課に、「可能形」が第 27 課に導入され、『ようこそ』には、両形式は第 28 課に導入される。『日本語初歩』にも両形式が同時に (第 23 課) 導入される一方、『文化初級日本語』には可能形しか導入されていない (第 22 課)。

3. ノルウェー語における可能表現

ノルウェー語には、動詞の可能形は存在しない。可能の意味は「能力」であろうか「状態」であろうか、主に「助動詞の kunne (現在形 kan) + 本動詞」という統語論的な構造で表

現される。

9) Han kan spille gitar.

主語 可能 動詞 目的語

彼 できる 弾く ギター

(助動詞) (本動詞)

彼はギターを弾くことができる。

他に、可能性を表わす二次的な手段もいくつかあるが³、基本的には上述の構造で可能の概念を表わす。要するに、日本語の動詞の活用形である可能形に当たるものはノルウェー語には備えていないが、「～ことができる」に類似している構造が存在しているのである。この事実はおそらくノルウェー人の日本語学習者が可能表現を学習する際、何らかの影響を及ぼすだろう。それを明らかにするため、ノルウェー語を母語とする日本語学習者を対象に、普段初歩的な問題として見なされている上述の可能形式を身に付けていく過程で、具体的に何を行い、どのような問題点が生じるかについて論じる。

4. 研究の進め方

議論を進めるにあたり、以下に示された方法を採用し、可能表現の習得に関する言語調査を行った。

4. 1 被験者の学習環境、人数、調査実施時、使用教材について

本調査の対象となる被験者の第二言語習得の環境は、ノルウェーのベルゲン大学において日本語を初級レベルから受講することである。この大学の日本語講座は2年間、4学期制であり、授業は週に10時間(1時間は45分)、12週(学習時間数:通算120時間)を1学期としている。具体的には、学生12名を対象にして、半年にわたり、2つの特定の時期で言語調査を行った。

ベルゲン大学の日本語講座において、1年目は、国際交流基金日本語国際センターが主として海外で日本語を学習している学生のために制作した「日本語初歩」という教科書と、ノルウェー語で書かれた日本語の文法説明書(Solvang(1993, 1995))を使い、2年目はノルウェー人の日本語教師が作成したテキスト集を使って、日本語を勉強している。既に観察したように、「日本語初歩」は「～ことができる」と動詞の可能形を同課の第23課に導入するので、可能表現は講座の1年目の後期の後半で教授した項目ということになる。データの収集は、1回目は1年目の後期が終わろうとしたところ、2回目は2年目の前期が終わったところで、被験者の学習時間がおおよそ240時間と360時間という時点で行われた。

4. 2 データの抽出方法

言うまでもなく、被験者が気づかないように、それらの自然な日本語可能表現表出を収集することが理想である。しかしながら、本論文で対象にしたノルウェー語を母語とする

日本語学習者の場合、教科書や教師指導による教室環境の中で日本語を学習しているので、それらの日本語表出をごく自然な言語環境の中で観察することはできなかった。結局、被験者に日本語可能表現をなるべく表出させる方法として、翻訳法を取り入れることに決めた。この手法には、刺激文を解説したり、翻訳したりする符号化が必要なので、被験者の言語表出が自然な言語表出に近いのではないかと考えられる。具体的には、被験者にノルウェー語で書かれた、可能表現を含んでいる文章を日本語訳してもらった。被験者へ提示したノルウェー語の資料は、25 個の文章である。調査に際し、他の要素をできるだけ除外するため、ノルウェー人の被験者にとって難解だろうと思われる語彙を抽出し、単語表を用意した。さらに、万が一被験者は単語表以外の語彙にも困った場合、被験者に自分の好みの辞書と漢字辞典を使わせて、被験者の可能表現に対する難易の程度だけが明らかになるよう努めた。

4. 3 調査文

以下、被験者に提示したノルウェー語の文章に日本語訳を付けて、列挙する。参考までに、それぞれの文について日本語訳の例を添えた。

1. Kan du spise japansk mat?
日本料理食べられますか？
2. Jeg kan ikke lese kinesisk.
中国語は読めません。
3. Du kan kjøpe billetter i butikken der borte.
あの店で切符が買えます。
4. Kan du svømme?
あなたは泳げますか？
5. Jeg kan ikke huske hvordan den kanjien der leses.
その漢字の読み方は覚えられない。
6. Jeg kan ikke spille piano.
私はピアノが弾けない。
7. Kan du komme tidlig i morgen?
明日早く来られますか。
8. TV' en er i stykker, så idag kan jeg ikke se TV.
テレビが故障しているので、今日はテレビを見られません。
9. Jeg kan ikke stå tidlig opp om morgenen.
私は朝早く起きられない。
10. I den banken kan du veksle dollar.
あの銀行でドルが換えられます。
11. Det kan jeg ikke tro på.
それは信じられない。

12. Kan dette vannet drikkes?
この水は飲めますか。
13. Denne fisken kan ikke spises.
この魚は食べられない。
14. Jeg kan ikke klare å lure folk.
私は人を騙すことができない。
15. Slike dyr kan ikke lenger sees i Norge.
ノルウェーではそのような動物はもう見られません。
16. Hvor mange kan kjøre i denne bilen?
この車には何人が乗れますか。
17. Det var så varmt i natt at jeg kunne ikke sove.
昨夜はとても暑かったので、眠れなかった。
18. Han kan snakke tre forskjellige språk.
あの人は3ヶ国語が話せる。
19. Kan du synge en japansk sang?
日本語の歌を歌えますか。
20. Har du ikke billett, kan du ikke komme inn.
切符がないと、入れませんよ。
21. Jeg kan ikke drikke alkohol.
私はお酒が飲めない。
22. Barnet vårt kan ikke gå ennå.
うちの子どもはまだ歩けません。
23. Ringer du til Værtefonten, kan du høre værmeldingen for i morgen.
天気予報案内に電話すれば、明日の天気予報が聞けます。
24. En kan ikke kjøpe øl før en er atten år.
18歳未満の人はビールを買うことができない。
25. Alle ansatte kan bruke kantinen.
社員は誰でも食堂を利用することができます。

5. データ解析の結果と考察

先ずは、筆者が日本語の可能表現を引き起こすノルウェー語の文章を作成するに努力したにもかかわらず、被験者がある程度可能表現以外の表現も適用したことを述べなければならない。実は、被験者の中には、終始一貫して可能表現を使わずにタスクを済ましたのが2名いた。その2名分の被験者の結果はデータ解析から外した。また、それ以外10名の被験者の結果をみると、25個の文章中可能表現を適用していなかったのが全体を通じて5文あったので⁴、それらの文の結果も解析から外すことにした。データ解析の対象となった

残りの 20 文章に対する結果を、適用した形式の割合によって図 1 と 2 にまとめた。

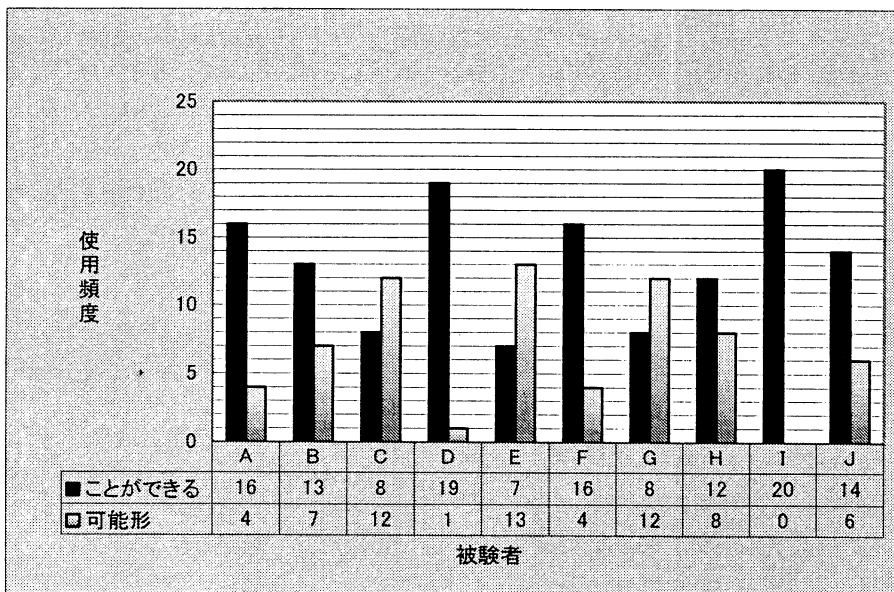


図 1 「～ことができる」と可能形の使用頻度 1 回目

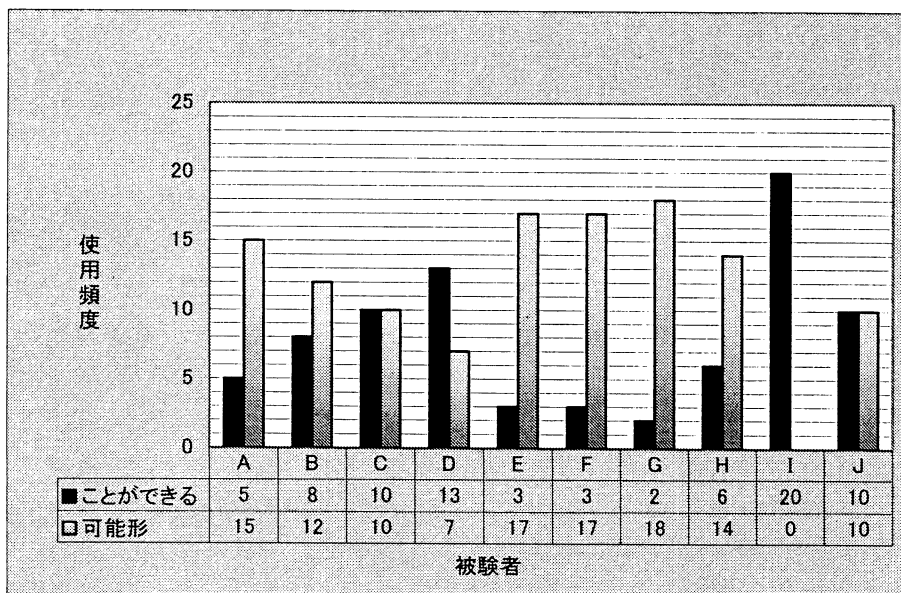


図 2 「～ことができる」と可能形の使用頻度 2 回目

図が示すように、学習者の 1 回目と 2 回目の調査の時に適用した可能形式の使用頻度の差が目立っている。殆どの被験者は、可能表現が導入した間もない学習段階において、「～

ことができる」という形式を選んで、適用した。しかしながら、学習が進むにつれて、半年後の調査では、被験者が、わずかな例外は別として、「～ことができる」という形式から動詞の可能形へ移行した傾向が明らかである。各被験者がそれぞれ 1 回と 2 回目の調査に適用した可能形式の差を計算すれば、動詞の可能形はどれほど増えたかが一見して分かる。その増加分を図 3 に示した。

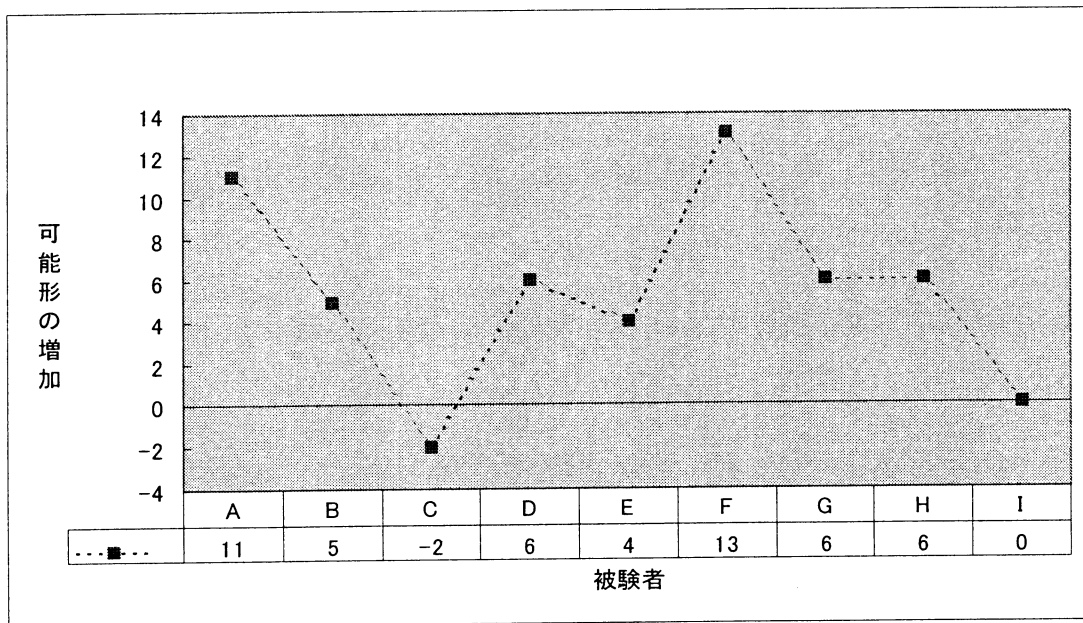


図 3 各被験者の可能形の増加

学習段階を経て、殆どが可能形へ移行したことが認められるが、平均的にどの程度移行したかを統計的に調べることにした。被験者数は 10 名と少ないため、母分散が未知な場合の移行数平均値の標本分布について考えることにした。こういう場合は、母分散を標本不偏分散で代用した t 統計量を用い、それが自由度 $10-1=9$ の t 分布に従うものとして、95% 信頼区間を求める。図 3 の表から移行数の平均値 (\bar{x}) は 4.90 (文)、不偏標準偏差 (s) は 4.46 となり、又自由度 9 の上側 2.5% 点 (t) は 2.26 となる。それぞれの値を

$$P(\bar{X} - t \frac{s}{\sqrt{10}} \leq \mu \leq \bar{X} + t \frac{s}{\sqrt{10}}) = 0.95$$

に代入すると、移行数は平均的に [1.71, 8.09] の間にあると 95% 信頼できるということが分かった。従って、各被験者の結果に見られる「～ことができる」から可能形への移行状態を総括的にまとめてみると、図 4 に示す通りである。

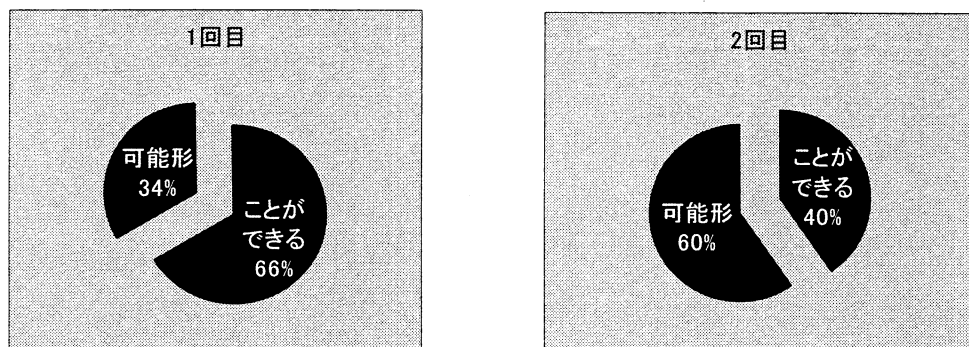


図4 「～ことができる」と可能形の割合の変化

ノルウェー人の日本語学習者が用いた教科書には、「～ことができる」と動詞の可能形が同課に導入されたことを3章で示した。しかしながら、学習者が表出した可能表現を見ると、早い学習段階では、「～ことができる」という形式が圧倒的に好まれたようである。その理由を追求しようとすれば、学習者の母語における可能表現の表し方が手がかりとなるだろう。既に述べたように、可能性を表す手段として、ノルウェー語には統語論的なものしか存在しない。学習者は第二言語インプットを処理する時には、なるべく負担の軽減を図る様々な心的なプロセスが働いているだろう。そういう観点から考えると、日本語の可能表現が導入される時には、学習者が同時に二通りの形式に直面するので、処理上の負担が大分かかると考え得る。また、可能表現が導入されるまでには、学習者が他の動詞の活用形の処理中とも考えられるので、可能形の作り方で余裕がなく、母語の構造と類似している統語論的な「～ことができる」を最初に取り入れて、余裕が出るまで可能形を保留しておくとも考えられる。

繰り返して考察したように、1回目の調査の時の「～ことができる」と動詞の可能形の使用上の割合が2回目の調査の時に逆転した状態を示している。しかしながら、そういう事実があっても、学習者が動詞の可能形を完全に使いこなしているとは限らない。以下に学習者の可能表現表出に示された主な困難点を示す。

- * 可能形の作り方そのもの。可能形を正しく作るのが困難のようである。他の活用形との混同も見られる。それはおそらく、学習者が動詞の基本的な分け方をちゃんと覚えていないため生じた困難であろう。(例：かえられます→買えます、のられます→乗れます、できられる→できる、うたえられます→歌えます、など)
- * 可能形を適用できない「～ている」形にする。(例：泳げている)
- * 見える・見られる、聞こえる・聞けるという動詞の使い分けが困難である。
(例：今日はテレビは見えない、天気予報が聞こえます)

さらに、「可能形」と「～ことができる」と無関係に、全体として可能文に用いられる助詞に戸惑う傾向が見られる。可能文では、目的語を「が」で表すのが基本であるにもかかわらず、ノルウェー人の日本語学習者は「を」を比較的によく適用している。

6. おわりに

本論文では、ノルウェー語母語話者の日本語学習者が可能表現を学習している過程で、学習プロセスに伴う特徴および困難点について考察してきた。先ず分かったのは、初歩的な問題として見なされていても、可能表現は学習者から見れば意外と面倒なものということである。また、学習者が動詞の可能形よりも「～ことができる」という形式を最初に身に付けて、学習が進むにつれて可能形へ移行することが示された。更に、学習者にとっていくつかの共通な困難点も明らかになった。これらの成果を日本語教育の場面で生かせれば、益々日本語習得の能率向上に貢献できるのではないかと思われる。そのために、「～ことができる」と動詞の可能形の導入を学習のどの段階で行うかについて先ず議論すべきであると筆者は考える。

注

¹他に、「あの人は信頼できる」や「この酒は飲める」の例が示すように、対象の属性（性質や特徴）を表わす可能表現もある。それらには語彙的な制限があり、普段は上級レベルまでは扱われていないので、ここでは取り上げないようにした。

²この点については、久野（1983）、渋谷（1995）などで議論されているが、詳しいことについては本論文では触れない。

³主体には能力があることを強調したい場合には、助動詞の *kunne* の代わりに、*greie* あるいは *klare* などのような助動詞を用いる。これは英語における *can* と *be able to* とのニュアンスの違いと同様である。

⁴詳しく説明すると、文章7、16、25の場合、可能表現よりも許可表現（～てもいい）を適用した被験者がいたということである。さらに、文章5と20の場合、動詞の現在進行形あるいは基本形の否定形（覚えていません、入りません）を適用した被験者が幾人かいた。

謝辞

本研究は通信・放送機構の研究委託「人間情報コミュニケーションの研究開発」により実施したものである。

参考文献

- 国際交流基金日本語国際センター（1985）『日本語初歩』改訂版 凡人社
久野すすむ（1983）新日本文法研究 大修館書店
渋谷勝己（1995）「可能動詞とスルコトガデキル」『日本語類義表現の文法（上）』
宮島達夫・仁田義雄（編）くろしお出版
姫野昌子（2001）「日本語教育における文法の指導—可能表現を例として—」
『日本語学』3号
文化外国語専門学校日本語科（1995）『文化初級日本語』文化外国語専門学校
益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
AOTS（1994）『新日本語の基礎』スリーエーネットワーク
Palmer, F.（2001）*Mood and Modality* 2nd ed., Cambridge University Press
Solvang, H.（1995）*Grunnleggende japansk grammatikk, del 2.*
Bergen University, Institute for Phonetics and Linguistics
Tohsaku Yasuhiko（1994）『ようこそ』、McGraw-Hill, Inc.